

独学者と読書

—R. オールティック『イギリスの一般読者』をめぐって—

中 島 俊 郎

リチャード・オールティックの『イギリスの一般読者』は、「歴史家の見地から、工業化されて民主化が進んでいく社会にあって、読者がどのような地位におかれていたのかを研究しようとする (1)」¹きわめて野心的な試みで、歴史研究、社会学、文学研究におけるもっとも水準的な文献であり、半世紀にわたりその価値はいささかもゆるがない。「古典」と称してもよい研究書である。²そして本書のなかでも独学者と読者の関係を論じた第13章 (The Self-made Reader) には、オールティックの研究法が余すところなく開示され、新しい読者層が生まれ、習得した読書によって身を起こしていく過程がつぶさに描かれている。新しい読み手の誕生を追究した本書の白眉といってよい。

本稿においてはこの第13章のテキストを詳述し、いくつかの点で補足をほどこし、独学と読者の関係、そして読書体験というものが人間の生きるうえで大きな指針になることを実例でもって第3節で示し、検討してみたい。

1 Richard D. Altick, *The English Common Reader: A Short History of the Mass Reading Public, 1800-1900* (Columbus: Ohio State University Press, [1957] 1998), p. 1. この文献からの引用は第2版により、引用する該当箇所はそのページ数を括弧内にしめす。

2 たとえばともにあげられている参考文献からその学問的な質がわかる。“The Secularist periodical such as the *Oracle of Reason*, the *Freethinker's Magazine and Review*, and the *National Reformer* become required reading in conjunction with such works as Richard D. Altick's *The English Common Reader: A Social History of the Mass Reading Public, 1800-1900* (1957) and, even more pertinent, Robert K. Webb's *English Working Class Reader, 1790-1848* (1955), not to mention the work of such labor historians as the Webbs and E. P. Thompson.” David J. DeLaura, ed., *Victorian Prose: A Guide to Research* (New York: The Modern Language Association of America), pp 474-75.

I オールティックの意図とその成果

ジョナサン・ローズ (Jonathan Rose) は、新版に寄せた「前書」のなかでリチャード・ダニエル・オールティック (Richard Daniel Altick) がヴィクトリア朝文化研究者として独創的でありえた理由を二点あげている。第一に正規の大学院教育を受けなかったこと。次に盛衰をくりかえした理論の流派、つまりニュー・クリティシズムからポスト・コロニアリズムにいたるまでどの方法論にもくみしなかったことを指摘し、「時代の先端を走っているような批評流派を追随しているようでは真に独創的な業績をあげるなどおぼつかない (ix)」と論断している。

では、オールティックが新しい学問領域で先駆者となり、時代を切り拓く「刃」となれた研究分野とは具体的に言えばどのような分野なのであろうか。「みずからの学識をあらかじめつぎ込んだその新分野は、今日では書籍史 ('the history of the book') として認知されるようになった」つまり「社会、経済、文化の観点からみた印刷物の歴史である。今日では歴史学方法論のなかでも、もっとも革新的で急速な成長をみせている分野であり」そして「『イギリスの一般読者』を読みなおしてわかるように、その創始者こそ、オールティックその人であった (ix)」と結論づけている。³

アナール学派は社会的視点に立ち、一般人や日常生活の実態を数値であらわす研究方法を発達させ、リュシアン・フェーブル、アンリ＝ジャン・マルタン共著『書物の出現』 (*L'Apparition du livre*, 1958) はまさにその研究史を開拓

3 ローズがオールティックの追究したあとを受けて、さらにその研究を推し進めようとしているのは明白である。"This book addresses a question which, until recently, was considered unanswerable. It proposes to enter the minds of ordinary readers in history, to discover what they read and how they read it. It is relatively easy to recover the reading experiences of professional intellectuals: authors, literary critics, professors, and clergymen extensively documented their responses to books. But what record do we have of "common readers," such as freedmen after the American Civil War, or immigrants in Australia, or the British working classes?" Jonathan Rose, "A Preface to a History Audiences," *The Intellectual Life of the British Working Classes* (New Haven: Yale University Press, 2001), p1.

した嚆矢に立つ業績である。だが、これが学問の興味深い点であるのだが、オールティックはほぼ同時期、同じ方法論にたつ『イギリスの一般読者』を用意していた。とはいえ、それをアナル学派との類縁性でとらえるのは間違っている。オールティック自身がそれまでに追究していた研究対象の延長上に、アナル学派のそれが誕生してきたという方が正確であろう。なぜなら、研究の核ともいえる中心命題をオールティック自身がみごとに要約してみせていたからである——「出版業が営利目的の企業として始まった時点から、潜在する読者数を見積もり、はたして出版社側の言い値で買う意志があるのかどうか、なにかなく今日好まれる作品は何か、というのが原稿を植字工にまわすべきか否かを決断するうえでの印刷業者にとって最大の関心事であった。ここ数世紀の著述業の歴史はすべて、ある意味でこのような決断の積み重ねから生成されたものなのである」(ix-x)。ここで言及されている出版事業そのものに種々の学問分野を横断する因子が抱懷されている事実を見出すのはたやすい。

『イギリスの一般読者』の「初版 前書き」は上梓までにオールティック自身がこうむった恩恵に対して、研究所、図書館、文書館などの関係諸機関、助力を惜しまなかった関係者諸氏への謝辞に終始している。いわば「前書き」というよりも「謝辞」に近いものであるが、この大著の締めくくりの言葉が、じつに無気味な色調をおびている。「本書で述べられている過去の体験の上に、どのように想像力を働かせてこじつけてみても、絶対確実な未来への手引きを見出すことはできない。それでも表面全体を覆う多様性の下には、ひとつの時代と次の時代を結ぶ深い連続性が、つまりわたしたちの時代とヴィクトリア朝ならびにその父の時代とを結ぶ輪が潜んでいる。わたしたちの呼び名にちがいはあれ、小説のまわっている形態もまちまちであれ、今日の読書大衆が提起している問題の本質とは、19世紀に提起されたものと同じなのである。〈過去に関して正しい情報を得ている者は、決して現在にかんしても陰鬱で憊んだ見解は抱かないものだ〉こんな書き出しでマコーレーは『英国史』を語りはじめている。いや、この点にかんしては未来についての見解もそうなるのだろう。だが、このようなららかな調子でこの本を締めくくるなど、現実にも目を向けている人間の感覚からは、あまりにかけ離れた芸当でしかない。犯してしまった失敗、頑なに抱きつづけられた偏見、見込みがありそうだったのに手つかずの

ままに終わってしまった目的達成のための方法。こういったもののような本書のなかに、未来の、民主化された社会において、印刷物をより賢く、十全に活用するための手がかりが、いくつか見出されるかも知れない。そんなふうを期待するのもあながち愚かとも言いきれないのではないだろうか」(375-76)と書いた書物の運命についての黙示録ともいえるような通奏低音は、再版のオールティック自身の「緒言」へと結びついていく。オールティックは初版を上梓したのち半世紀の間、たえずこの問題を考えてつづけていたのである。

「第2版 緒言」はまさにこの結末部を受けついだかのような書き出しで始まる——。「『イギリスの一般読者』の新版は、まさに書物と読書習慣の未来が相反するふたつの雲行きによって視界をさえぎられている時代に出版されることになった。一方では、少なくともアメリカ合衆国では、雨後の筍のように巨大書籍チェーン店が増殖し、たがいに激しく競合しながら、なんとか潜在顧客に足を運んでもらって気軽に立ち読みしてもらおうと、誘ってやまない。こうした今日の現状を見ると、テレビやコンピュータ・ゲームその他先端技術を用いた娯楽との競争があるとはいえ、本や雑誌はいまだに本書がとり扱っている過去の長い期間にみられたのと何ら変わらず現代大衆市場の興味をそそるものであるのか、と思えてくる。あの明るく広々とした品揃えの豊富な宝庫ともいふべき書店に足を踏み入れる者は、つまるところ『スペクテーター』や『タトラー』といった雑誌が出版されていたあの時代に、一杯かそらのコーヒーを口実にコーヒーハウスに立ち寄っていたロンドンの住人とさして変わりはない。じつは新聞や雑誌の最新号に目を通したくてきているのである」(xv)と。

本を手にとらなくなった人々、紙媒体でないメディアが氾濫する現状をオールティック自身は、「だがこれに反して紙に印刷された文字でなく、スクリーンに映し出された文字を読ませるデジタル・テキストの出現は、われわれに不吉な予感を吹き込む」と、とらえ、「ドイツ語でいうビュッフエルデンメルング (*Bücherdämmerung*)、つまり活字の滅ぶ日が、正確な時期こそ定かではないが、近づいているのだ」(xv)と暗い未来を予兆している。

オールティックの所論につづいて耳を傾けてみよう。

未来に待ちうけている運命が何であろうとも、1957年の本書の出版——その際に書いておいたように、「大衆読者をひとつの社会現象としてとらえた最初の大規模な研究書」であった——と時を同じくして、社会歴史学ともいべき研究が始まり、そのとき以来、学問成長の主動力のひとつとなっている。活字を文化の産物としてとらえ、読書を、やがて社会全体の活動にまで発展していった個人活動としてとらえた研究がいかに多いかは、今回新たに付録として補足した参考文献の規模を見れば十分わかるだろう（'Supplementary Bibliography', pp. 413-27.）。

オールティックの研究法について資料の扱い方には定評があるが、研究範囲を限定しているところに、その集中力が現れることもわかってくる。ゼロから本書のような本を書こうと試みるものなら、と、オールティックは言葉をつづけていく。膨大な新情報や斬新な見方を自家薬籠のものにしておかなくてはならない。本書で扱ったように、その当時における西ヨーロッパさらにはロシアでの伸展は考慮から除外し、イングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランドに出現した大衆読者だけに限定してもまだ大変な量にのぼる、つまり研究範囲をマイنتズのヨハン・ゲーテンベルクからというよりはむしろウェストミンスターウィリアム・カクストンに由来するイギリスの遺産に限定しても、である。近年の出版文化史に向けられる関心の大きくなうねりのなかでももっとも印象的な面は、「文献の社会学」という、内包力ゆたかな惹句に暗示されるように、たんに多くの学問領域にまたがっていることだけにとどまらず、扱う年代や地域の点でも広がりを見せているのである。19世紀以前のイギリスにおける読み書きできる人の割合や、読書の普及の度合いにますます注意が払われるようになったため、本書の第3章までの部分で、やむをえず大まかにしか述べられなかったために舌足らずになった分の埋め合わせが行なわれるようになってきている（xvi）。つまり、こうした研究の広がりこそオールティックがねらった文化史の射程であることがわかってくる。

参考文献の充実ぶりが際立つ著作としては、と、オールティックは参考文献の探索にかけては人後に落ちない自負があるので、じつに的確に研究の見取り図を描いていく。前述したリュシアン・フェーブルとアンリ＝ジャン・マルタンの『書物の出現』（英訳『書物の到来—印刷術の影響力—1450年から1800年』、

1979年) や、エリザベス・エイゼンシュタインの『変革動因としての印刷業—近代初期ヨーロッパにおけるコミュニケーションと文化の変貌』全2巻(1979)、さらにはロバート・ダントンが行なった啓蒙主義時代のフランス出版業及び読者にかんする先駆的研究があげられる。そしてより明確な輪郭が描かれていく。

「本書が出版されたころ、アナール学派のフランス歴史学方法論に幾分刺激されたこともあって、社会歴史学者は大衆文化という、幅は広いが従来から軽く見られていてあまり顧みられることのなかった分野を真剣に着手しはじめた。そのなかには余暇活動に注目し、それをどう利用してきたか、その内容はどんなものであったか、そしてついにはどのように商品化されるに至ったかといった問題も含まれている、と、オールティックの狙いが書物にのみに限定されていないことを知り、われわれは驚くのである。この分野の著作で、影響力の点で劣っていないのがピーター・パークの『近代初期ヨーロッパの大衆文化』(1978年)である。他にこれに関連深いものとして、産業革命以前とそのさなかにおける読み書き能力の歴史に関心をいだく学派もあり、そこでは研究者たちは従来の調査方法を問題にし、しばしばその誤りを指摘してきたが、その過程ではかなりの論議が産み出されることになった。読む能力があるということは、(独学という不確定要素は別にして)たとえささやかでも学校教育を受けたからこそであり、イギリス文芸復興時代からの初等教育と成人教育の歴史をかつてないほど集中的に研究するようになってきた」(xvii)。ここでオールティックが「独学」を教育上の「不確定要素」として指摘している点は注目に値する。オールティックはさらにつづけて述べる――。

物としての書物にますます注目が集まったのは、文化の力に潜む計り知れない原動力が物質的なかたちであらわれているものとしてとらえられたからである。そしてまた成長のとどまるところを知らない消費社会に供給される商品としての価値ゆえでもある。新たに付けられた参考文献を一瞥すればわかるのだが、学術研究所に保管されている出版社の公文書や映像に収められた資料などが利用しやすくなってきているのに、ここ数十年のあいだに個人経営の出版社史がいくつか出版されているのである。考えられる理由のひとつとしては、経営のしっかりした出版社ほど巨大資本をもつ複合企業に買収され、また吸収合

併されてしまっ、はっきりした独自性がなくなってしまうことがあげられる。「業界」全般の生産及び流通機構、つまり経済と文化を産み出している機械の歯車のひとつに新たな関心が集り出したのだ。大衆に読み物を提供するもうひとつの機関、公共図書館の歴史は、主として図書館員自身の手によって綿密な調査が行なわれてきた。社会のあちらこちらで行なわれている変革を推し進めるお手本とすべき好例といえる。つまり、当初はほとんど取るに足らない存在であっても、ひとたび施設として組織化されれば、そのあまり高貴ではない諸説諸々の各図書館の起源も、洗いなおしてみると威厳が見出され、そこで活動する人たちは、当然、自分たちは知的職業に従事している専門家なのだという自覚をもつようになるのである。この指摘にあるように図書館の機能を読書行為との関係を追究する作業が今後はもっと調査されるようになるはずである。

20世紀後半の学問がたいいそうであったように、書物とその読者にかんする歴史研究もその大部分は専門誌（『出版史』『図書館史』『教育の歴史』など）や学術団体というかたちをとって、あらゆる人々が参加して行なわれてきた。アメリカ国会図書館に「書籍センター」が設けられ、ほどなく国際学術組織である著述・読書・出版史研究会（Society for the History of Authorship, Reading and Publishing, SHARP）と（イギリスの）ケンブリッジ書籍プロジェクト（Cambridge Project for the Book）がこれに加わった。さらに他の団体も交えた論文発表のための協議会が催され、そこで発表される論文をまとめると数巻にもものばる量に達し、そこから本書の目録に加えられたものも10を超える、と研究動向を示し、現状の概要を伝える（xvii-xviii）。

学派にこだわるものが全くなかったオールティックがいくつかの学問流派をつくり出したのは皮肉でもあるが、興味深い現象でもある。読者がもっていた表面化している嗜好、あるいは暗に示されただけの嗜好にかんする研究（たとえばそれは巡回図書館の所蔵書や出版社の販売業績となってあらわれる）のいくつかから産み出された副産物としては、ウェイン・ブース、スタンリー・フィッシュ、ヴォルフガング・イーザーらが1970年代に起した、もっぱら理論と解説を中心にして読者受容の研究をしていた学派（the reader response school of theoretical and explicatoy criticism）に、量こそかぎられてはいるが、事実にもとづく資料を提供し、この学派の論理的基盤を構成するまでになったこと

があげられる。さらに近年になってからは、ジェローム・J・マクガンが書籍販売の歴史に一工夫加え、「社会化されるテキスト（‘socialized text’）」という概念、すなわち原著者に代わってテキストを出版業者や印刷業者に、そしてつきつめれば批評家や読者に迎合したものにしてしまう影響力にとくに重点をおいた、「校訂研究」に応用している（xviii）。

最後に結論としてオールティックは自信をこめて自己の態度を表明している——「これらは大衆読者の歴史研究が他のさまざまな文献研究に直接影響をもたらした例である。書物の未来について考えるのは何も今に始まったことではないし、流行りぐさりもあるが（今日でもマーシャル・マクルーハンを読む人がはたしているのだろうか？）、時に歴史がわかりにくく記録されることはあっても、過去の事実はずねに不変で変えることはできない。書物についての知識を増やせば、550年間にわたって書物がヨーロッパの文明化にきわめて重大な役割を果たしてきたという事実の認識はそれだけ深まっていくはずである」（xviii）。

II 独学者の肖像

以下の戯文は芝居から影響を受けた若者たち——たった今、劇場から出てきたばかりである——が、たちまち舞台上の台詞に影響を受けて語り合っている口汚くもあるが、愉快な一文である。

First Juvenile.—I say, wasn't it well acted?

Second Juv. — I believe you. I do likes to see them sort o-robber pieces. I wouldn't give a tizzy to see wot is call'd a moral play—they ar' so precious dull. This Jack Sheppard is worth the whole on 'em 'em.

Third Juv. — How I should like to be among the holly cocks; plenty to eat, drink and spend—and everyone has his *mott* tool.

Fourth Juv.—Ar; shouldn't I like to be among 'em in real arnest. Wot jovial lives they seem to lead! And wot's the odds, so long as you ar' happy? Only see how such coves are handled down to posterity, I thinks it's call'd, be means of books, and plays, and pictures!

Fifth Juv.—Blow'd if I shouldn't just like to be another *Jack Sheppard*—it only

wants a little pluck to begin with.—All Five.—That's all.⁴

ニューゲート・ノヴェルを舞台化した劇作品ゆえに若者を惹きつける魅力があるのだろうか。だが、この若者たちは野卑な言葉に満ちているニューゲート小説をある程度知っているのである。果してこの若者たちは自分であの小説を読んだのであろうか。断定はできないが、少なくともひとりには読んでいたはずである。1830年代には若者文化のなかに芝居、書物、ポスター（‘means of books, and plays, and pictures’）という言葉、視覚媒体が取りまいていたのである。では教育を受ける機会がなく、文盲に近い者は『ジャック・シェパード』をこの若者たちのように理解できたのであろうか。オールティックは独学者と読者の関係をきわめて説得力あるすがたで描いていく——。

独学者

「彼らこそは厳密な意味での独学者だろう」とオールティックは独学者たちの姿を具体的に述べはじめる。「たいていは2、3年しか正規の学校教育は受けておらず、8歳か9、10歳で学校を出て、1日1、2ペンスにしかならない徒弟や麦畑でカラスを追う仕事に就いていた。労働党の基礎をつくったひとり、ベン・ティレットのようにまったく平日学校へ通った経歴のない人もいた。また後に文献学者となるジョゼフ・ライトのように、7歳のときに工場に送られ、そこの付属の学校で半日授業を受けるという、あまり効果のない教育しか授けられていない人たちもいる。後には非国教徒の校長が経営する学校へ子どもが通う場合も見られるようになった」（244）。

ヴィクトリア朝時代は一面、伝記の時代とも言えるが、自伝というジャンルが確立した時期でもあった。オールティックはその文学的豊かさに着目するよりも「事実」の宝庫として自伝に関心を寄せようとしている。

「独学によって読書を習得した者が残したごくわずかな自叙伝は、統計値や一般論よりはるかに事情をよく伝えてくれる。若者たちはどこで運よく書物に

4 ‘The March of Knowledge: or Just Come from Seeing “Jack Sheppard”’, *Penny Satirist: A Cheap Substitute for a Weekly Newspaper*, 3 (14 December, 1839), p. 1.

出会えたのか。何を読み、どんな状況に置かれていたのかがわかってくる。そして自分と同じ身分の低い生まれの読者についてしばしばどんなことをほのめかしているかを読めば、自己啓発のために本を読む一般読者の数は、少なくとも悲観論者が言っているほど少なくはなかったという確信を深めさせてくれることにもなる(243-44)」。ここには何とか本を読みたい、文学を解読したいと願う読者の姿がある。

オールティックは前述のライトの逸話から独学者の像を築きあげていく。言語学者ジョゼフ・ライトがマックス・ミュラー(Max Muller, 1823-1900)の後を襲ってオックスフォード大学の教授になったとき、同時代人の驚きは文盲に近い者が最高学府の指導者になれたことにあったようだ。新聞の見出しには「ロバ引きが教授に」(‘From Donkey-boy to Professor!’)「職工の栄達」(‘Millboy’s Rise to Fame!’)とか「15歳のとき、読み書きできなかったものが教授に」(‘Professor who could not read or write at 15!’)といった文字が踊ったという。やはり同時代人の関心は文字をあやつることができなかった者がどのようにして文字、言語を専門にする学問をきわめることができたのかという点に興味が集中したようである。ライト自身がよく口にしていたのだが、自分の業績は方言辞典によって名がのこるであろう、と(‘The one thing I wish to be remembered by is the *Dialect Dictionary*’)。ジョンソン博士の時代からイギリスの辞書は一個人の力によって作成されてきた。このような一大事業をこなすリテラシーの習得はどのように形成され、その原動力を何が支えていたのであろうか。このような探究を深めていくと、読書、つまり本を読むということは、単に文字を追って教養を身につけていくという営為だけではない、ということが判明してくるはずである。たとえば、ライトが編纂した『方言辞典』全6巻も失われた、失われゆく言語を採集する試みであった。失われてしまった言語(方言)とともにひとつの文化も消えていくからである。

後に言語学とりわけ方言学で不朽の業績を残すこととなるジョゼフ・ライトこそ、オールティックが言うように「独学の人」の名にふさわしい。それゆえ、ここでオールティックが言及していない面にも着目して独学者の肖像を一瞥し

てみよう。

綿織物工で石切工でもあった父 (Duffon Wright, 1817-66) の子供として、ライトはブラッドフォード近郊のアイドル (Idle) の街に生まれた。「『怠惰』という名前の街に生れて、終生なまけものだった」とは、ライトがいつも口にする冗談であったが、精励と独学の人であるライトの口からもれると誰が冗談と受け止めたであろうか。

ライトには資質を見抜いた偉大な母がいた。小さな一部屋しかない家屋のなかで4人の子供を育て上げた母 (Sara Ann Wright) は、クレイトンにある救貧院に子供とともに入り、他人からパンをめぐんでもらうような生活をなめた。わずか5歳のジョゼフはオリヴァ・ツイストさながらの生活を地で行っていたのである。⁵

母親アンを支えていたのはメソジスト派への信仰であった。人生が過酷であるときほど胸をはって威厳を



J.ライトの母(70歳)



J.ライト(12歳)

5 独学で身を立て恒久的な貢献をなしたライトのことをV.ウルフは限りない尊敬の念をもってあおぎ見ていた。“Old Joseph Wright & Lizzie Wright are people I respect. Indeed I do hope the 2nd vol. will come this morning. He was a maker of dialect dixerries: he was a workhouse boy—his mother went charing. And he married Miss Lea a clergyman’s daughter. And I’ve just read their love letters with respect. And he said “Always please yourself—then one person’s happy at any rate”. And she said “make details part of a whole—get proportions right”—contemplating marriage with Joe. Odd how rare it is to meet people who say things that we ourselves could have said. Their attitude to life much our own. Joe a very thick sturdy man—I am unique in certain respects’ he said. ‘We must leave some record of Joe & Lizzie to posterity’. Had his old working mother to Oxford. She thought All Souls would make a good Co-op. Had a first & struck boys. His notion of learning. I sometimes would like to be learned myself. About sounds & dialects. Still what use is it? I mean, if you have that mind why not make something *beautiful*? Yes, but then the triumph of learning is that it leaves something done solidly for ever.” Virginia Woolf, *The Diary of Virginia Woolf, 1931-1934* (London: Hogarth Press, 1982), pp. 115-16.

ウルフは「14歳のとき、独学で本を読めるようになった」ライトの生涯を「思わずひき込まれてしまうような物語」と感じ、自らの次作 (*The Years*) を構築する礎のひとつにしたのである。「ひとつの有望な小説を考えて眠っていた」と同じ日付の日記冒頭にいみじくも書きつけている。

もち生きるように教え諭したのはこの母にほかならない。刻苦勉強してつねに自己向上をはかるようにという母の助言。何百万語という採集された方言を系統的に配列していくといった気の遠くなるような辞書作成を支えたのも幼少からの母の教えであったであろう。

6歳になったライトは自宅からさほど遠くない石切り場で採掘した石をロバにのせて運ぶ係り (a donkey-boy) をしていた。朝の7時から夕方5時まで休みなく働き、磨滅した鋳夫の斧などを鍛冶屋まで運び、打ち直してもらうのもジョゼフの役目であった。

7歳 (1862年)、ジョゼフは、ティチユス・ソールト (Titus Salt, 1803-76) がつくった理想郷の紡績工場で働くようになった。織機の円筒を交換する仕事に従事し、週給3シリング6ペンスかせいでいた。半日働き、半日学んだのはこの時期にあたる。オールティックも述べているように厳しい就学環境にあったと言わねばなるまい。だが、ライトが正規の教育を受けたのはこの学校のみであった。しかも学習した教科はわずかばかりの算数だけであり、文字を読むことも書くことも習わなかったのである。⁶

こうした生活は13歳まで続くのだが、さらに大きな紡績工場に移っていたジョゼフに転機がもたらされる。普仏戦争 (the Franco-Prussian War) が勃発



J.ライト (19歳, 後列右端)

6 J.ライトの伝記は未亡人の手で著されたが、じつはJ.ライトの晩年、ふたりで協力して記憶をたどりながら書き出したという。その意味で一種の自伝でもあるのだ。"At the age of six he began regular employment as a donkey-boy. He was thus able to say on his fifty-sixth birthday—and he did say it with great pride—'I have earned my living for half a century.' From seven in the morning till five in the evening he drove a donkey-cart, carrying quarrymen's tools from a stone-quarry at Woodend to the nearest smithy to be ground. The blacksmith paid him eighteen-pence per week, and each quarryman paid him a penny. /The room in which he worked at Saltaire was situated in the 'Old End' of the mill room No.13. It was called 't'slave 'oil' [=hole] in those days, 'because the people in that department were very hard worked—scarcely a minute's rest—but it should be mentioned that they got sixpence a week more than other people'. He took his own breakfast and dinner with him to the mill, but others, more opulent than he, bought food on the premises. 'Saltaire Mills', he tells, 'did all they could for their work-people, being much ahead of other mills at that date in providing facilities. There was a common dining-room where you had ↗

したのである。新聞は戦況を大々的に伝えるのだが、ジョゼフは字が読めないから、大声で友人に朗読してもらい術がなかった。この屈辱的な状況を打破しようとジョゼフの胸には大きな決意が宿ったのである—「ぜったいに文字を読み、書きできるようになろう」。読み書きの技術を習得したのは15歳のときであった。⁷

↳ a good dinner for about threepence—beefsteak pie, or stew, &c. Others could have what they brought with them heated free of charge. I always had my food warmed. There were large ovens for the purpose, numbered according to the room in which you worked. You could buy a pint of hot tea or coffee for a halfpenny. Men brought it round in a large can, and you provided your own "pint-pot", an earthenware mug, blue willow-pattern, or with a picture of the Prince of Wales on it. Even at home people had their tea in these pint or half-pint mugs, and only on formal occasions had teacups and saucers. We had them only on Sundays, when we drank tea, other days we drank only milk and hot water.' /When not at work, the 'half-timer' went to a special school for the half-day, provided by Sir Titus Salt. This was the only school Joseph Wright ever attended, so that it is a fact that never in his life did he have a full day's schooling. He says he learned very little there, except in arithmetic. Mr. George Morrell, afterwards for nearly forty years head master at the Shipley School Board's Central Schools, began his teaching career at the Saltaire Mill School in 1860, where he had some two hundred to three hundred pupils. He was Joseph Wright's first schoolmaster. He at once took kindly to his new scholar, and the latter still cherishes a deep feeling of gratitude and regard towards him, and is wont to relate with affectionate pride that once, when he was a 'half-timer', Mr. George Morrell gave him a pair of trousers. As a rule a boy remained a 'half-timer' till the age of thirteen, but Joseph Wright had left the school and was doing full-time work long before he had actually attained that age. He says: 'When I left school, I knew very little more than when I first went. I knew the alphabet, and had a smattering of elementary arithmetic, and I could recite, parrot-like, various Scriptural passages, and a few highly moral bits of verse; that was almost precisely the extent of my educational equipment after three or four years of schooling. Reading and writhing, for me, were as remote as any of the sciences.' Remote, too, were much of the vocabulary, and the entire sound-system of standard English as a spoken language. For very many years yet he spoke nothing but the purest Bradford dialect." Elizabeth Mary Wright, *The Life of Joseph Wright* (Oxford; Oxford University Press, 1932), I, p.15.

7 "During the Franco-Prussian War he used to listen to the men who worked with him reading aloud from newspapers in their dinner-hour vivid accounts of battles and sieges, and discussing with one another the things they read. He was intensely interested. Envy and longing now stirred in the mind of the young Joseph Wright. Why should he be debarred from getting all this first-hand? He determined to acquire the art of reading, and so satisfy this newly awakened craving for knowledge." *Ibid.*, p. 32.

ジョゼフのもとにあったのは聖書とバニヤンの『天路歷程』だけが道しるべとなる書籍であった。そして字が読める友人 (Alfred Brooks) の助力もあったことをわすれてはならない。ジョゼフの独学を支えたのは、二週間ごとに刊行される『キャッセル・ポピュラー・エデュケーター』であり、この語学コースでフランス語、ドイツ語そしてラテン語と丹念に学んでいった。外国語はすべてこの教科書から学んだのであった。

ライトの学問基礎を育んだ教材を開発した人キャッセルも典型的な独学の人であった。

III 読書環境

オールティックは独学が形成される「環境」について考察を進めていく。子どもたちが学校へ通ったとしてもごく短い期間でしかなかったからといって、何も親が教育に無関心だったとは限らない。ただ身分の低い人たちが経済的に厳しい状況で生活しており、またそうした人たちが無料で人並みの教育を受けられる施設も不足していたことの現われにすぎない。回想録を読んでみてもわかるのは、少なくともわずかながら蔵書を備え、片親あるいは両親が子どもの書物への関心をかきたてる役割を果たしていた家庭も存在していた点である。オールティックはそうした一例として兵士であり、ジャーナリストであったアレグザンダー・サマーヴィル (Alexander Somerville, 1811-85) をとりあげる。彼の父はスコットランドの採石場の労働者で、ナポレオン戦争が終わった後の数年など、家族はほとんど飢餓状態に置かれていたが、それでもわずかな家財の中にある宗教関係のささやかな蔵書は宝物のように大切にしていた (他に家財といえば窓があった。一家が移住するたびにどこへでも持っていき、小屋の壁に据付けるのだった) という (245)。

次にオールティックが目にするのはもうひとりの独学者である。

トマス・バート

トマス・バートの父は息子トマス同様鉾山で働き、労働組合主義者のはりりとなった人であったが、説教や神学に凝っていた。敬虔なメソヂストのため

軽文学の類はけっして認めず、チャールズ・ウエズレー、アイザック・ワッツ、オーガスタス・トップレディ、ジェイムズ・モンゴメリーといった人たちの讚美歌を読むことで詩への情熱を満足させていた。(245-46)

後年、労働組合のリーダーとなり、国会議員となるトマス・パート(Thomas Burt, 1837-1922)は、何代にもわたり炭鉱労働に従事した家系の一員であり、父ピーターは炭鉱夫であったし、母レベッカも炭鉱整備者の娘であった。

パートが7歳のとき、父は組合活動の犠牲となってダーラムの鉱山へ移動を余儀なくされる。こうした不安定な生活のためパートは正規の学校教育をほとんど受けてなかった。十代後半には熱心な読書家に変貌していたのである。母方の祖父がパートに見どころを覚え、薫陶したためと言われているが、オールティックは、このような階級の者がどのように読書という営為に没入していったのか、ひとつの典型的な「一般読者」の例として、パートに関心をいだいていたようである。

パートは10歳で炭鉱の地下へもぐり、通風口の開関係として長い鉱夫の職を開始する。ノーサンバーランドへ帰るまでいくつもの鉱山で小型馬の誘導者として採鉱作業に従事する。16歳の時、労働争議にまぎれこまれ、組合活動に専念することを余儀なくされ、新ノーサンバーランド鉱山組合(the New Northumberland Miners' Mutual Confident Association)の書記に選出され、後年まで(1905年)その職にあった。

喘息という持病があった仕立て屋トマス・カーターは、1845年にチャールズ・キングズレーがカーターの残した『ある労働者の回想録』(*Memoirs of a Working Man*)を出版しなければ、今では誰にも存在さえ知られていなかったはずである。カーターの回想録によると、あるワイン商のもとで地下貯蔵室係りをしていた彼の父は、聖書二冊、祈祷書、綴り字教本、ワッツの『頌徳賛美歌集』(*Divine and Moral Songs*)そして「汚損され、半分にちぎれた説教集や神学関係の論文も何冊か」所有していたという(246)。

労働階級の蔵書

19世紀前半を通じて労働階級の蔵書で特徴的だったのは、宗教文学が大きなウェイトを占めていた点である。それはスコットランドにおけるカルヴァン主義、あるいはイギリス非国教教徒の主義に基づく古いピューリタンの伝統が根強く残っていたり、再燃していたりした証しでもある。地方では特にそうで、宗教団体の機関が実質的に、どんな書物を流通させるかを決定しているようなものだった。町なら貧しい人も、もう少し世俗的な本を手に入れる場合もあった。たとえば1830年代にハイドで週30シリングで糸紡ぎをしていたサミュエル・ブロードベルトは、コロンブスのアメリカ大陸発見について書かれた本を1冊、『ロビンソン・クルーソー』、選挙法改正法案に関するパンフレット、「二流小説」、協同組合運動の定期刊行物、他にいろいろな宗教関係の書物を所有していた。時がたつにつれ、世俗的な書籍や定期刊行物がどんどん手に入りやすくなっていくが、宗教関係の書物も根強く残っていた(246)。

さらにオールティックはイギリス見聞旅行をしていたテーヌの記録におもむく。

1860年代にイギリスを旅行したフランスの文芸評論家イポリット・テーヌの記録するところでは、主に宗教関係の書、歴史、伝記、旅行に関する本、他には家族の健康、ウサギの飼育、農作業その他、これに類する実用手引書が農家

8 文芸批評家テーヌはきわめて精力的に資料を探索をしている。環境を重視するその方法論の態度を垣間見ることができよう。"At the Athenaeum I read the works of all kinds of theologians, historians and erudite scholars; I am getting saturated with facts, like a sponge. /Stuart Mill's *Logic* and Bain's *Physiological psychology* are much praised here; they have some merit, but they are not geniuses. On the contrary, Dr. Jowett (Master of Balliol College) and Dean Stanley (of Westminster), whom I visited at Oxford, are very advanced historians and critics—almost German. /My journey will have been fruitful; what pleases me especially is that the formula I drew from History and Literature turn out to be correct. The principal point to be altered is the idea that English people are stiff and disagreeable. No one could be kinder. /I have read, looked and listened to the best of my ability; I have seen the House of Lords, the House of Commons, Harrow and Eton, prisons and hospitals, religious and charitable meetings, aristocratic and middle-class *salons*, museums and parsonages, clubs and libraries, four or five villages and towns near London, and all sorts of people, especially distinguished people. All this I owe to you, my dear fellow, and I thank you most heartily. H. Taine, *Life and Letters of H. Taine*, translated by Mrs. R. L. Devonshire (Westminster: Constable, 1904), II, pp.168,169,170, and 171.

の書棚にも載せられているのが印象に残ったという(246)。⁸これが労働者階層の平均的な蔵書と見なしても大きな齟齬は来さないであろう。

1904年、ランカスターのある一地域が行った現地調査によると、労働階級の家で最もよく目につくのは聖書、パニヤンの著作、子どもが平日学校で褒美にもらってきた本、宗教、道徳書、『ランプの灯り』、スーザン・ウォーナーの『広大な世界』、『クイーチャー』(Queechy)などが人気のあった宗教小説である(246)。

いくぶんなりとも幅広い嗜好を持った親についての記述も、ここかしこに見られる。たとえばフレデリック・ロジャーズ(Frederick Rogers)の父は船乗りをやめたあとロンドンで港湾労働者をしてしたが、「文学について少しは学があり、パイロンの残した海の描写が大好きで、スコットランドの船乗り詩人ファルコナー(Falconer)の「難破(‘Shipwreck’)」を詩の名作中の名作と見なし、[チャールズ・]ディブディン(Dibdin)の海の歌もいたく気に入っていた」。原始メソジスト派説教師のジョゼフ・アーチ(Joseph Arch)は、1870年代に全国農業労働者組合を設立して大いに迫害されたが、彼の母というのは、あるジェントルマンの御者の娘で、母自身も結婚するまではウォリック・キャッスルで召使をしていた人だった。ジョゼフは母が「シェイクスピアを深く敬愛しており、四六時中、シェイクスピアの話をしていただけだから……作品についても詳しかった。夜になると何節かを私に朗読したり、また戯曲の内容を話して聞かせたりもした。日曜日になると同じように聖書も読んでくれた。そして聖書に出ているいろいろな物語についても語ってくれた。シェイクスピアと聖書が私の子守唄だったし、私も別に他の本が欲しいとは思わなかった」と記している(247)。

読書への関心

つまりどんなに卑しい家庭に生まれた子ども、たいした教育は受けていない親がささやかな本のコレクションを大切にし、子どもたちの胸に読書への関心を宿らせていた例は見出せる。それに本好きは年長者から若者に伝わるばかりでもなく、妻から夫へ、または男同士でも伝えられていた。アレグザンダー・サマーヴィルの父の同僚には、妻から読み方を教わっていた男がいた。「彼は

18人もの天文学者の著書を読み、さらに他の分野のものもたくさん読んでいた……ある日曜などは天文学の本を借りるために20マイルも歩いたという」、日曜にはパンの中をくりぬき蜂蜜か砂糖を詰めてつくった軽食をとると、麦畑に寝転がり、一日中心ゆくまで本を読んでいた。アレグザンダーの方も、詩人バーンズ存在を知ったのは仲間の刈り取り人夫との話を通してであり、バーンズの詩を朗吟してもらったり、その生涯について聞かされたりしていた。生粋のスコットランド人であるこの友人から、国民的詩人バーンズのぼろぼろになった著作集を借りることにアレグザンダーは成功した。「この預かりものには特に気を使った。誰にでも貸してくれる代物ではなかったから」父は息子が反故同然の本を手に見ているのを見て、読ませていい本かどうかいぶかっていたが、やがて「バーンズの天才が父を信用させた。私の手からその古本をとると何度も繰り返し読んでいた。いかめしかった表情がなごみ、顔はほころんでいた。そしてある行までくると笑みは満面に広がった。そこまでは黙読していた父は、声に出して読みはじめ、ふたりとも大声で笑った」。それでも完全に無害とは思えなかったのだろう、息子が詩を読みたいと言い張るのを目の当たりにした父は、汗水たらして稼いだ一週間分の賃金の半分をはたと、『福音ソネット集』の一冊を買い与えた。息子によると「ありがたく頂戴して読んでみただけのもの、どうしても読み手の私にも作品の中にも何か物足りないものがあるような」気がしてしまうのだった(247-48)。

独学の代名詞のような人物に進化論論争のなかでかならず注目されるスコットランドの地質学者ヒュー・ミラーがいる。

地質学者ヒュー・ミラー

地質学者ヒュー・ミラーもスコットランド人だが、その自伝の中には、主に詩集で80冊から100冊の蔵書をそなえクロマティーの丘を謳った30行の詩をつむぎ地元で評判を得ていた「文学好きの指物師」の話や、「アイルランドの劇作家ファーカー(Farquhar)の戯曲から長老派教会の聖職者フラヴェル(Flavel)の説教にいたるまで、いろいろな種類の本をしっかりと読んでいた大工」の話も見つかる。「この大工は父も祖父も……読者家で本をよく集め、書棚いっぱいほろほろになるまで読みこまれた書物が並べられていたが、なかには稀観

本もあり、著述にたずさわる人間ならつねに重要視する、〈出版の完全な自由〉のありがたさを謳歌しているように私には思えた。ミラーがクロマティー時代とくに特に恩を受けた人は、フランシス何某という事務職員や商船の船荷監督にかつて従事していた人で、ひげ文字で印刷された占星術の著書数点をはじめ、野菜の特性、民間療法、イギリス評論家の著作多数、旅行記、航海記を少々、ギリシアの詩と劇の翻訳といった書物を所有していた。若かった頃のトマス・クーパー (Thomas Cooper) には、食料雑貨商の助手をしているヘンリー・ウィロックという友人がいた。ふたりは日曜日ごとに占星術や占いをいっしょに研究していたが、やがてイギリスの評論や、ラングホーンが訳した『プルタークの英雄伝』(Plutarch) に関心が向くようになったという (248)。⁹

9 “The class to which I now belonged… had its round of spelling ; and in these last I acquitted myself but ill; partly from the circumstance that I spelt only indifferently, but still more from the further circumstance, that, retaining strongly fixed in my memory the broad Scotch pronunciation required at the dames’ school, I had to carry on in my mind the double process of at once spelling the acquired work, and of translating the old sounds of the letter of which it was composed into the modern ones. Nor had I been taught to break the words into syllables; and so, when required one evening to spell the word ‘awful,’ with much deliberation — for I had to translate, as I went on, the letters a-w and u-l spelt it word for word, without break or pause as a-w-f-u-l. ‘No,’ said the master, ‘a-w, aw, f-u-l, awful; spell again. ‘This seemed preposterous spelling … and so I spelt it as at first. The master recompensed my supposed contumacy with a sharp cut athwart the ears with his tawse ; and again demanding the spelling of the word, I yet again spelt it as at first. But on receiving a second cut, I refused to spell it any more; and determined on overcoming my obstinacy, he laid hold of me and attempted throwing me down… We swayed from side to side of the school-room, now backwards, now forwards, and for a full minute it seemed to be rather a moot point on which side the victory was to incline. At length, however, I was tripped over a form; and as the master had to deal with me, not as master usually deals with pupil, but as one combatant deals with another, whom he has to beat into submission, I was mauled in a way that filled me with ached and bruises for a full month thereafter… [A]ll I could do at this time was to take down my cap from off the pin, when the affair had ended, and march straight out of school. And thus terminated my school education.” Hugh Millers, *My Schools and Schoolmasters: or, The Story of My Education* (Edinburgh: Johnstone and Hunter, 1854), p. 92. David Robb, “Stand and Unfold Yourself: *My Schools and Schoolmasters*,” Michael Shortland ed., *Hugh Miller and the Controversies of Victorian Science* (Oxford: Oxford University Press, 1996), pp. 246–64.

19世紀後半ではトマス・パートが、仕事仲間の鉱夫の間で読書が好きな人間の集まりがあるのを耳にした。そこには、まるで科学の専門家のようなサム・ベイリー、「アーティマス・ウォード、マーク・トゥエインに代表されるアメリカのユーモアリストを初めて紹介してくれた」フランク・ベル、詩に熱中しているジョー・フェアベアンといった人物がいた。パートとフェアベアンは、当時有名だったP・J・ベイリーの詩『フェストゥス』(*Festus*)に熱中して意気投合し、フェアベアンはすぐパートにワーズワスの詩のすばらしさを教えてやることになった。そのおかげで長い年月を経たあと、議会で席を占めるまでになったパートは、下院図書館の回廊に集まった傍聴人にワーズワスの詩の朗読をたびたび行ってみせたものだった(248-49)。

蔵書の貸与

また時には思いやりのある熟練工の親方が、本に飢えた見習い工に蔵書を貸し与えてやる場合もあった。トマス・カーター(Thomas Carter)も毛織物商で仕立て屋の親方だったが、彼は18世紀に人気の高かった詩、歴史書、評論からなる自分のコレクションを、カーターに自由に使わせてくれた。同様にしてトマス・クーパーの文学への欲求も、靴職人の親方によって満たされていた。徒弟に入ったこの親方は、バイロンの詩について「熱く語り」、クーパーにその著作集を貸してくれた。このクラークという親方は、かつてロンドンに住んでいたころにはよく観劇に出かけていて、上演されたシェイクスピアの劇作について繰り返し話して聞かせるため、そのたびにクーパーは昔読んだ戯曲を思い出しては、そこに新たに教わった情報を付け加えるのだった。

労働現場での読書環境はどうであったのか？

1833年、工場委員会(the Factory Commissioners)は、大小の工場が自ら書籍を購入しているという報告を受けている。それによると、仕事が始まる前や機械が修理されている間を利用して少年たちは本を読むし、「少女たちもよく工場まで本を持ってきて読んでいる……宗教書以外はあまり見かけない。時には歌の本の場合もあるが、はしたない本は見かけない」ということだった。このような慣例は、本来眉をひそめるべき性質のものであって、ちょうど訓練

の場で兵士がポケット版の小説に読みふけるようなものだが、ときたま回ってくる監督員は、イギリスの工場がどこも「暗くて悪魔の作業場のような」ところ、という印象が世間に広まっているのを打ち消したいためか、こう打ち明ける。「きちんと仕事ができれば問題はない。私自身も紡績工をしながらよく読んだものです」。だが何せ経営者側にいる今となっては、彼のこんな発言も他の人の証言と同じように鵜呑みにするわけにはゆかない。大きくて騒音がひどく、刑務所や兵舎の規律を範としている工場内での生活が、作業中にも読書ができるような雰囲気だったとは考えにくい。だが比較的小規模で、とくに工場長自身が本好きなら、読書が大目に見られたり勧められたりすることもあった。婦人帽製造業や仕立て屋の作業場では、ひとりの従業員が他の者のために朗読してやり、聞かせてもらう側が金を出し合って、朗読者の本代をもってやる習慣がところによってはあった(249-50)。

アレグザンダー・サマーヴィルの逸話

オールティックの語り口のうまさは逸話の紹介にもあふれ、出色である。サマーヴィルの興奮が再現されている一節をみてみよう。アレグザンダー・サマーヴィルの語っている逸話からは、鍛冶屋の作業場のようなところでまで文学が浸透している場合もあったことがうかがえる。かつてバーンズの詩の楽しさをサマーヴィルに教えてくれたあのジェイムズ・ウィルソンが、たまたまある村の鍛冶屋の作業場に立ち寄ったところ、アンソン提督(George Anson, 1697-1762)の『航海記』(*A Voyage Round the World in the Years 1740-1744, 1748*)が置いてあった。それは鍛冶屋が借りてきたもので、火のしが焼けるのを待つ間だけ思い出したように読むのだという。ウィルソンからこの話を聞かされたサマーヴィルは、そうざらにはいないほどの恥ずかしがり屋の自分に打ち勝って、なんとしてもこの本を見てやろうと心に決めた。「ひとつにはアンソン提督著『航海記』の持ち主のところに行って本を借りて読みたいという願望をこらえながら、その一方でコールテンの服に鉾を打った厚底靴、ハイランド名物のウール地縁なし帽といういでたちをしている自分のような人間が、きちんと玄関も裏口もそなわっている家に上がりこんでいく気恥ずかしさをも克服しようと戦っていたわけだが、そんな私の胸のうちは、いわば脳内戦争の状

態で、何週間も心の平和は訪れなかった」。だが気恥ずかしさに打ち勝ったサマーヴィルは本を借り、自分の作業場であるチューリップ畑で、昼休みを利用して読んだ。草むしりをしている仲間たちが戻ってきて、サマーヴィルからアンソン提督の奇跡のような冒険を聞かされると、そのとき以来、みんなは自分の昼食をチューリップ畑に持ちこんで、サマーヴィルの朗読を聴きながらとるようになった(250)。サマーヴィルの友人たちは挿絵のトド、アシカをながめ、胸をしめつけられるような興奮をおぼえたであろうと推察できる。

職場での読書

雇い主や監督員がよそ見さえしてくれればどんな職に就いていても、本当なら仕事に精を出していなければならぬ時間にも、少しだけ本を読むことはできる。サミュエル・バンフォード (Samuel Bamford) は後に急進的な社会運動家となり、職工詩人としても知られた人だが、19世紀初頭にはマンチェスターにあるサラサ捺印工場で事務所の雑用係兼運搬人をしていた。倉庫に居心地の良い場所を見つけ、仕事の合間をぬってその場所で歴史や伝記、さらにはコベットの発行している『ポリティカル・レジスター』(Political Register) など、ありとあらゆる読み物を読んでいた。その数十年後に現れた下層階級の詩人ジョゼフ・スキップシー (Joseph Skipsey) は小さいうちから働きに出されていたが、自分の持ち場である鉾抗内の跳ね上げ戸にチョークで字を書いて書き方を覚えた。戸に隠れて詩を読んだだけでなく、始めての創作も試みている。

1860年代の後半には、これとはかなり趣の異なる舞台だが、グレーヴズエンドの衣料品店で助手をしていたヘンリー・アーサー・ジョーンズ (Henry Arthur Jones) の話が残っている。『失樂園』を夢中になって読んでいると、こうるさい女性が何かリボンを求めて来店した。最初にジョーンズが開けた箱のリボンでは気に入るものはないという。すると彼は店中の箱や盆を持ち出してカウンターの上に広げて見せ、「どうぞ、好きなものを選んでおいてください」と言うと、またミルトンを読み出した。ジョーンズは衣料品業界では成功しなかったが、社会喜劇で大いに名をはせることになるのである。

言うまでもなく本を読みながら仕事などすれば災いのもとになることが多い。たとえ災いが他の人に及ばなくても——いや、鉾抗の入り口で文学を読み

ふけるスキップシーのような存在は、容易に事故を招きかねなかった——少なくとも自分自身の災いの種にはなる。たとえば後に過激な政治諷刺を書いて出版したウィリアム・ホーンも、十代のころには、ある職場を解雇されているが、彼の働いていた部屋には鍵のかからない本箱がいっぱい並んでおり、読んでみたい誘惑に打ち克てなかったのが原因だった。そして安手の扇情小説がイギリスの子どもたちの間で人気を博すようになると、事務所の雑用係の少年を外へ遣いにやるのは至難の業だ、と雇い主がたえず嘆く有様になってしまった。『ブラック・ベス』(Black Bess)や『タイバーン・ディック』(Tyburn Dick)といった連載小説の最新版に人目も憚らず夢中になっていたり、運悪く見つかってしまったりして解雇される例は、驚異的な数字にのぼっていたにちがいない(251)。因みにディック(Dick Turpin)は有名な追いはぎで、その愛馬がブラック・ベスであった。

下層階級読者の残した回想録

下層階級読者の残した回想録のいたるところに、若い頃よい読み物が手に入らなかったことを嘆く記述が見られる。家の書棚や友人、雇い主の書棚に並んでいる本はすぐに読み尽くされてしまう。そして少なくとも18世紀半ばまでは読書欲を募らせた読者の行く手には恐るべき障害が立ちはだかっていたのだ。じつは次の章では大衆にも手が届くくらい書物が安くなるまでに、どれほど多くの時間を要したかを明らかにするつもりだ(とオールティックは予告する)。さらに新刊本に手ごろな値がつけられるようになっても、ある程度の数の中から選べたのは、書店のある比較的大きな町に住む人に限られた。それ以外のところでは、かなりの距離を歩かされて、副業としてほんのわずかだけ書籍も扱っている文房具店や衣料品店に出かけて行って手に入れば、まだ幸運な方としなければならなかった。どうしても欲しい本を買うためなら何マイル歩かされようとも、子どもたちは何とも思わなかった。ジョン・クレアは13歳のとき、トムソンの『四季』の一節を偶然知って夢中になり、『四季』一冊丸ごと買ってやろうと決意した。ある日曜日、父から18ペンスもらって最寄の町スタムフォードに向かった。「けれどもそこに着いたとき、町中で若い店員に(手に何か本を持っているので)とウィリアム・コリンズの『オードと詩』だった)

日曜はどこの本屋も休みだと聞かされた」。がっかりしてクレアは歩いて帰ったが、次の週が終わらないうちに、ある少年に1ペニー払って自分の仕事を代わってもらい、再びスタムフォードにもどり『四季』を入手し、「その町のはずれにあるパーリー公園の壁によじ登って入り、壁際の芝生に身をあずけた」。そこで彼はトムソンをむさぼり読み、将来詩人になるための礎を築くという貴重な体験をしたわけである(252)。

古本屋

「お金のない人の寄り集まるどころ」つまり古本屋は、都市における書籍のとりわけ重要な供給源で、また16世紀からこのかたずっと印刷物をさばきつづけてきた業者が店を出す地方の縁日や定期市などでも、小規模な古本市が催された。こうして貧しい読者でも手を伸ばせばなんとか届くところまできた本は、大部分とは言わないまでも、かなりの数は、読者が読みたい本でもなければ、読んでわかる本でもなく、それが一番の問題だった(252)。

ジェシー・コリンズは後にバーミンガムで政治家になり、農業労働者連合で農業改革に活躍し、下院から内務次官にまでのぼりつめた人だったが、その父はエクスターの露店から古本を買ってきてくれたことがあった。ジェシーは回想録の中で、それは「おかしな寄せ集め」だったと評している。

コーンウォールの大工の家に生まれたジョン・パースモア・エドワーズは後に編集者として成功し、半ペニー紙『エコー』を買収して新聞を経営するほどの長者で慈善家になるのだが、ロックの『人間悟性論』やニュートンの『光学』の古本をコーンウォールの州都トルロで買って帰ったまではよかったが、読んでみても彼にはさっぱり歯が立たなかったという(252-53)。

ヘンリー・メイヒューの記事

19世紀の古本業にまつわる数少ない信憑性ある話のひとつに、『パンチ』誌の編集者ヘンリー・メイヒューが、自分で立ち寄ってみたロンドンの露店に並

10 次に掲げる二種類の統計表はメイヒューの作成になるものである。Henry Mayhew, *The Morning Chronicle Survey of Labour and the Poor: The Metropolitan Districts*, (Sussex: Caliban Books, 1981), III, p. 115 and pp. 152-53.

ぶ本について記したものが挙げられる¹⁰。もちろん店頭にはありとあらゆる種類の本が並んでいた。19世紀に行われていた慣行は、その50年前と少しも変わっていなかったと見え、『スペクテーター』紙の古い号や、分冊で出版された古い『パミラ』をばら売りしていたが、これなどセットで売るよりも早くさばけ、しかも儲けもいいのであった。ある露天商がメイヒューに語ったところによると、なんとといってもアディソンからゴールドスミスに至るまでの18世紀の古典的小説がもっともよく売れる。シェイクスピア、ポーブ、トムソン、ゴールドスミス、ターパー、バーンズ、パイロン、スコットなどイギリス古典詩人

POPULATION OF THE PRINCIPAL OCCUPATIONS IN THE METROPOLIS

Domestic servants	168,701	Cabinet-makers and upholsterers	7,973
Labourers	50,279	Silk-manufacturers	7,151
Boot and shoe makers	28,574	Schoolmasters &c.	7,138
Tailors and breeches makers	23,517	Seamen	7,002
Dressmakers and milliners	20,780	Butchers	6,450
Clerks (commercial)	20,417	Bricklayers	6,743
Carpenters & joiners	18,321	Blacksmiths	6,716
Laundry-keepers	16,220	Printers	6,618
Porters, messengers, and errand-boys	13,103	Seamsters and seamstresses	6,269
Painters, plumbers, and glaziers	11,517	Booksellers, &c.	5,499
Bakers	9,110	Coachmen and guards, &c.	5,428
Army	8,043	Weavers (all branches) ...	5,065

ロンドンの職業別就業者数

の作品は、どれも非常に多くの分冊販売になっているため、きわめて低い価格で売れるので、ミルトン、ヤング、プライアー、ドライデン、ゲイといった詩人よりもよく売れるという。ただし同時代のフッド、シェリー、コールリッジ、ムーアといった19世紀の詩人が書いたものは、露店ではめったにお目にかかれなかった(253)。ここでオールティックの所論をより深く理解するためにメイヒューが作成したロンドンの主要な職種人口の割合に目を向けておこう。肉屋より多くはないが、御者、運送業者より多くの人(5,499人)が書籍販売に従事していたことになる。古本屋の数は圧倒的に多かったが、ロンドンで働いて

			Increase per cent
METROPOLIS			
Boot and shoe makers menders.....	1831	1841	37
Tailors.....	16,502	22,400	27
Carpenters.....	14,552	18,513	28
House-painters, plumbers, and glaziers.....	13,208	16,965	43
Bakers.....	7,349	10,531	40
Creengrocers, grocers, and tea-dealers.....	5,655	7,866	17
Bricklayers.....	5,462	6,390	25
Publicans.....	5,000	6,270	11
Butchers.....	4,697	5,212	32
Printers.....	4,332	5,710	52
Blacksmiths.....	3,628	5,533	77
Jewellers, goldsmiths, and silversmiths.....	3,391	5,923	6
Bookbinders, sellers, and publishers.....	3,129	3,421	32
Clock and watch makers.....	2,692	3,534	41
Sawyers.....	2,633	3,700	28
Coach-makers.....	2,180	2,791	77
Coopers.....	2,167	3,821	47
Plasterers.....	2,123	3,098	24
	1,871	2,321	
			Decrease per cent
Cabinet-makers and upholsterers.....	6,610	6,497	1
Linen-drapers, haberdashers, hatters, and hosiers.....	5,555	4,726	17
Barbers and hair-dealers.....	2,019	1,997	1
			Increase per cent
GREAT BRITAIN			
Boot and shoe makers menders.....	133,248	175,769	32
Tailors.....	103,247	141,750	38
Carpenters.....	74,054	100,080	35
Blacksmiths.....	58,142	80,543	40
Masons.....	49,155	72,934	50
Butchers.....	35,218	42,686	21
Bricklayers.....	29,593	36,049	22
Bakers.....	27,942	34,256	22
House-painters, plumbers, and glaziers.....	27,652	40,750	47
Creengrocers, grocers, and tea-dealers.....	25,603	38,873	52
Coach-makers.....	21,774	23,877	9
Millers.....	19,796	23,019	16
Wheelwrights.....	19,550	22,537	15
Sawyers.....	19,181	27,929	47
Carriers.....	18,859	30,972	66
Shipwrights.....	13,884	16,137	16
Coopers.....	13,246	16,012	21
Hucksters, hawkers, and pedlars.....	10,881	11,809	8
Clock and watch makers.....	8,892	12,464	41
Hairdressers and barbers.....	8,449	8,666	2
Booksellers, binders, and publishers.....	6,926	9,286	34
			Decrease per cent
Coach-owners.....	10,514	1,488	1,000
Publicans.....	61,231	50,495	21

ロンドン及びイギリス全国の職業別就業者数

いた召使いの三分の一の人口を占めていたという事実は少なからぬ驚きを与えるであろう。

■ その一世代前、つまり1825年頃に古本屋を愛顧していた人たちが店頭でよく見かけた種類の本は、50年代になるとほとんどがその姿を消していた。ドイツの詩人クロップシュトックの『メシア』、ウォルポールの『オトランドの城』、またその焼きなおしともいべきクララ・リーヴの『イギリスの老男爵』、パークの『崇高と美について』、ハンナ・モアの小説『良妻探し』(Coelebs in Search of a Wife, 1808) などである。さらに一世代さかのぼった(18世紀の終わり)頃には『人間の全権利』、『桶物語』、ジョン・ポンフレット(John Pomfret)の『詩集』、リチャードソンの小説集などが露店の店頭をにぎわしていたようだ(253)。ここでもわかるように、イギリスの古典作品ともいえる小説が人気を博してきた。

■ メイヒューの統計は1830年代から1840年代に至る10年間に書籍販売関係者がロンドンにおいて32%、イギリス全土において34%、ほぼ同比率で上昇していることを示している。また注目すべきはロンドンにほぼ40%の書籍関係者が集まっていることである。この割合にさほど変化がないということは、ロンドンが安定した書籍の供給地であることを示唆しているである。

ジョンソン博士の亡霊

■ 19世紀前半には街中の競売でも古本は売られていた。ジョンソン博士の亡霊が、生前自分もよく利用していたこのような競売場に出没したなら、汚れたスカーフをまいた赤ら顔の男が怠け者の一団に向かってこのような決り文句を並べ立てて自分の書いた本が売られているのを耳にして驚いたことだろう。「ほら『ランブラー』誌だ。ぶらぶらぶらぶらランブラー、ほらその若い奴。この本こそはな、若い娘が赤くなった本さ。お前たちにすりゃおあつらえ向きだろう。いやお前らも赤くなるか。そいつは俺だって同じこと。だがこれが仕事だ、売らねばならん。どこかのレディや紳士のだんな、ブランデーと水を持ってきておくんさい。一杯どう、とでも言ってもらえりゃ、こちらのブランデーについても、もっと話してやるんだが、何せ俺は見かけの通り、恥ずかしがり屋ときてやがる。さあ、買った。15ペンス。どうも、だんな。どうだ、また

売れたぜ」。メイヒューの時代ともなると、往來の邪魔になるということで、都会での競売行為は追放されてしまったが、地方では依然として行われていた(254)。と、オールティックはジョンソン博士の傀儡を使って雑踏の販売風景をユーモアをかもしながら描いているが、ジョンソン博士は『ランブラー』誌のなかに読書と教養の要諦を簡潔に書きつけていたのである。たとえば、――

Those who have been taught to consider the institutions of the schools, as giving the last perfection to human abilities, are surprised to see men wrinkled with study, yet wanting to be instructed in the minute circumstances of propriety, or the necessary forms of daily transaction; and quickly shake off their reverence for modes of education, which they find to produce no ability above the rest of mankind.

“Books,” says Bacon, “can never teach the use of books.” The student must learn by commerce with mankind to reduce his speculations to practice, and accommodate his knowledge to the purposes of life.¹¹

たしかにジョンソン博士が看破するように、書物はすべてを教えてくれるわけではない。その意味で独学者が厳しい環境のなかに身を置いて読書にいそむことは厳しいことにはちがいないが、逆に書物のなかにある世界へ入っていく近道かもしれないのだ。ある意味では人生の現実が本よりも豊かな世界をたえているのだから。

古本の仕入れ先

露天商にとっての古本の仕入れ先がどこだったかは、おおよそ見当はつく。出版社が売れ残りを処分する「業界内の競売場」だ(大手古本業者や、ぞっき本、復刻本を専門に取り扱っているトマス・テッグのような業者がまず思い思いに本を選んでいき、その残部を露天商が買っていった)。あるいは一般の競売、個人の売人からも仕入れていた。

11 Samuel Johnson, *The Rambler, The Yale Edition of The Works of Samuel Johnson*. (New Haven: Yale University Press, 1969), IV, p. 363.

メイヒューはこう報告している——「労働者や商人が落ちぶれて貧しくなっても、直接露天商のもとにどっさり本をもちこんで、さあ、これで半クラウンになりませんか、などと交渉したりすることはめったにない」と。

このように貧しい読者の中でも、安い古本市を利用できる人はかなり幸せな方だったが、それでも品揃えには乏しい。もっとも簡単に手に入るのが、有名な古典作品と一世代、もしくはそれ以上に人気のあった本だ。出版社や小売商人自らの手で処分されるものでもないかぎり、新刊本が廉価で手に入ることはなかった。19世紀後半になって安い再版本が広く流布するまでは、自分の蔵書を築こうにも金のない読者は、もっぱら他人の書棚で何年も、何十年もの間顧られなかった本を買って満足する以外に手はなかった(254)。

ここでオールティックの所論を少し中断して、ヴィクトリア朝出版界の異能を紹介しておこう。独学者の教養形成を議論する上で欠かせない人物だからである。「本屋の倉庫掃除をする箒」と、自らをなぞらえたトマス・テッグ(Thomas Tegg, 1776-1846)は、オールティックも直前で言及しているように、ヴィクトリア朝の読書界に安価な書物を供給しつづけた出版人であった。

9歳の時、孤児になったテッグを待ちうけていたのは地獄のような徒弟の日々であった。ダールキースの書籍商アレグザンダー・メゲット(Alexander Meggett)は幼いテッグをいじめ抜き、ついには逃走せざるをえないような状況にまで追い詰めた。そうした逆境のさなか、テッグのもとに200ポンドもの遺産がころがり込み、それを元手に友人と書籍販売をはじめた。だが、慣れぬ商売ゆえたちまち破綻をきたし、破産の憂き目にあってしまう。テッグの手元に残ったのは書籍競売人の免許だけであり、これを武器にしてイギリス全土をくまなくまわり、店頭、倉庫に眠っていた本を買い取り、せどりした本をロンドンで夜間に競売に付すといった事業を開始し、大成功をおさめたのであった。

1801年より小売販売を始めたテッグは、競売も並行しておこない、同時に新刊書出版も着手していた。『アルパニー—子供殺人者』といったゴシック小説のチャップブックを出版しながら、チープサイドで20年間、影響力をもつ書籍販売会社(The Eccentric Book Warehouse)を経営したのである。

テッグの書籍販売についてまずリプリント版の翻刻出版をあげなくてはなら

ないだろう。著作権の切れた在庫を倉庫買いし、とてつもない安価で店頭に並べるのである。たとえば、ジョンソン博士の『英語辞典』は5ギニーが通常価格であったが、テッグは半額以下の2ギニーで売り出したのである。テッグが手がけた作品にはロバート・バートン『憂鬱の解剖』、アダム・スミス『国富論』、『ジョン・ロック著作集』全10巻などがあつた。

こうした復刻事業ゆえ、テッグがもっとも恐れていたのは著作権の期限延長であつた。28年の期限を42年にしようとする議論が時あたかも天下をわかせていて、トマス・カーライルなどはテッグの廉価販売を非難した手紙を下院にまで寄せ、著作権は「最低でも60年間の期限を設けるべきである」と主張したほどである（1838年9月9日、下院議事録）。むろんテッグは基本的には延長に反対の立場であつた。ジョン・ラッセル卿への私信というかたちをとつたテッグが書いた小冊子（『著作権の延長問題』[*Extension of Copyright*, 1840]）には、読者にわたるまで何らかの障害によって、廃棄同然の処置にふされていた本をよみがえらせ、良書を多くの人々に安価で手渡すことができる事業が限りない愛情をもって語られている。こうした精神に立っているがゆえに、テッグは名門の出版社ジョン・マレー社の全書籍を買い取るといった行為にも出たのである。全355,000冊を8,000ポンドで買収した。

同時にテッグは時宜をみるのに敏な新刊書籍出版販売業者でもあつた。1805年、ネルソン提督がトラファルガー海戦で戦死した一報を聞き及ぶや、木版の肖像画をつけた伝記5,000部をいち早く出版している。『ナポレオン・ボナパルト伝』もこうした時代の波を読み、同じ価格で出版した。パンフレット類から『ロンドン百科全書』（*London Encyclopedia*, 1825）全22巻という浩瀚な出版物まで手がけたのである。

またいうまでもなく、『移民便覧』（*Handbook for Emigrants*, 1839）、『徒弟修業の手引き』（*Present for Apprentices*, 1848）などといった実用書の類も数多く出していた。1800年から1840年までの間で、テッグはほぼ4,000点を出版した。これは平均すると毎週2冊を出版しつづけたことになる。貧困にあえいだ青年期に比べ、90,000ポンドもの遺産を残したテッグは、成功者であるばかりか、書籍の廉価販売という功績によって独学者の教養を豊ませた人物として評価されるべきであろう。

さて、オールティックの所論にもどろう。無料図書館が町に現れるまでは、貧しい読者は巡回図書館から本を借りていた。18世紀の終わり頃、急進主義思想の持ち主で後に改革運動家となる革ズボン製造業者のフランシス・ブレイスは、本が欲しいときには一度に一冊ずつ、コヴェント・ガーデンを通るメイデン・レインにある小さな店で借りていた。

それから少し時代が下がると、後に軍人で政治家にまでなったエドウィンストウのクリストファー・トムソンなどは、下宿先の家の父親に読み書きを教える代わりに村の図書館で講読会員にもらっていた。

トマス・クーパーは、地元の名士が借りてきた新しい本や定期刊行物をゲインズバラにいる友人のトレヴァー夫人に読んで聞かせる役目をうまい具合におおせつかっていたという。おかげでスコットの最新刊の小説、キャンベル、ムーア、パイロンの詩、有名な評論や雑誌といったものを朗読できただけでなく、ある織物商が同じ町内の仲間のためにとはるか昔にとっておいた、今では誰も憶えていない本の隠し場所を発見する、というおまけまでついていた。クーパーはこう記している——「思わずわれを忘れてしまった。くもの巣が張った塵だらけの書棚にフッカー、ベーコン、哲学者ラルフ・カドゥース、ウスター主教、エドワード・スティリングフリート、ロック、ジェレミー・テイラー、カンタベリー大主教ジョン・ティロットソン、長老派教会牧師ウィリアム・ベイツ、劇作家でもあるジョゼフ・ホール主教……その他哲学者、神学者の著作が20はあった。それに混ざってスタンリーの『哲学者列伝』とその著に登場する面々の大きな全身像、スコットランドの印刷業者ホーグルビーが出した大きくて珍しい版画のついた『日本大使と中国大使』、歴史家スピードやラパンらの英国に関する歴史書、コリアーの『教会史』、フラーの『聖戦』、フォックスの『殉教者の書』のひげ文字で印刷され異様で粗雑な版画も付いた初版本などなど、ぞっき本、稀観本が山のように残されていたのだ」(255)。

第3節以下は、オールティックの所論から離れ、独学と読書の関係を体現した出版人の事例に目を向け、読書が生きる「力」となった事実を確認しておこう。

IV 独学の出版人

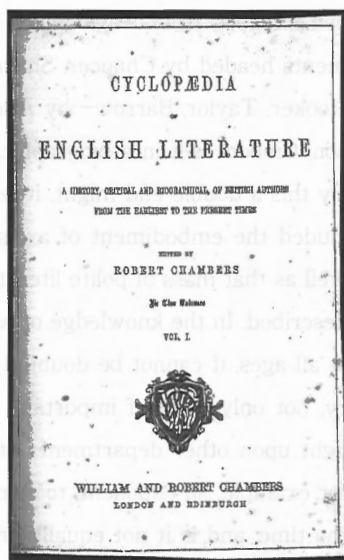
ウィリアム・チェンバーズ

兄弟で著名な出版業者になり、エジンバラ市長にまでのぼりつめたウィリアム・チェンバーズ（1800-83）が朗読によって文字通り生活の資をえていた様子をオールティックは愉快に描いている。「1820年代には年季奉公人をしていて、毎朝5時にパン屋を訪れ、主人とふたりの息子がパン粉を捏ねている間、本を朗読し、代わりに焼き立てのロールパンをもらっていた。『パン屋は本の種類にはこだわらなかった。ただ陽気でおもしろいものを読むように求めただけだった』。そこでチェンバーズはスモレットやフィールディングを選んで読んだところ、粉にまみれながら、耳をそばだてていた3人は『心から満足してくれた』。このように2時間半にわたって人を喜ばせると、窓のそばに大きな袋を折りたたんで作ってもらった専用の朗読席から降りたチェンバーズは、服についたパン粉を払い、ロールパンをもらうと、上機嫌で仕事に向かうのだった」。ウィリアム・チェンバーズが語っているこの逸話は、1815年から16年にかけての冬、カナル・ストリートにあったパン屋での実話であることをここで注目しておこう。

ロバート・チェンバーズ（1802-71）が編纂した、イギリス文学アンソロジーとも文化誌ともみなせる『イギリス文学史』の「序文」には彼自身の意図、目的が直裁に語られている。何よりも興味深いのは、文学「史」が〈知〉の体系として捉えられ、〈知〉の涵養に欠くことができない〈学〉として認識されている点である。

This work originated in a desire, on the part of the Publishers, to supply what they considered a deficiency in the Literature addressed at the present time to the great body of the People. In the late efforts for the improvement of the popular mind, the removal of mere ignorance has been the chief object held in view: attention has been mainly given to what might be expected to impart technical knowledge; and in the cultivation of what is certainly but a

branch of the intellectual powers, it has been thought that the great end was gained. It is not necessary here to present arguments establishing that there are faculties for cognizing the beautiful in art, though, and feeling, as well as for perceiving and enjoying the truths of physical science and of fact. Nor is it needful to shew how elegant and reflective literature, especially, tends to moralise, to soften, and to adorn the soul and life of man. Assuming this as granted, we were anxious to take the aid of the press—or rather of the Printing Machine, for by it alone could the object be accomplished — to bring the belles-letters into the list of those agencies which are now operating for the mental advancement of the middle and humbler portions of society.



チェンバース版「イギリス文学史」

イギリス文学史はイギリス史の一部であり、その言語により国民性（‘our national character’）も形成されたものであるとして、余すところなく総体としてのイギリス文学は国民の〈知〉を築き、ナショナルリティという地位を獲得する。とはいえ、余りにも文学への過剰な思い入れは、一歩間違えばナショナルリズムに墮してしまう危険も孕んでしまうことは注意しなくてはならない。でも、これがヴィクトリア朝の「教育」の一部であることは否定しようがない。

It appeared that, for a first effort, nothing could be more suitable than a systematised series of extracts from our national authors; ‘a concentration’—to quote the language of the prospectus — ‘of the best productions of Eng-

lish intellect, from Anglo-Saxon to the present times, in the various departments headed by Chaucer, Shakespeare, Milton—by More, Bacon, Locke—by Hooker, Taylor, Barrow—by Addison, Johnson, Goldsmith—by Hume, Robertson, Gibbon—set in a biographical and critical history of the literature itself.' By this a double end might, it seemed, be served; as the idea of the work included the embodiment of a distinct and valuable portion of knowledge, as well as that mass of polite literature which was looked to for the effect above described. In the knowledge of what has been done by English literary genius in all ages, it cannot be doubted that we have a branch of the national history, not only in itself important, as well as interesting, but which reflects a light upon other departments of history—for is not the Elizabethan Drama, for example, an exponent, to some extent, of the state of the national mind at the time, and is it not equally one of the influences which may be presumed to have modified that mind in the age which followed? Nor is it to be overlooked, how important an end is to be attained by training the entire people to venerate the thoughtful and eloquent of past and present times. These gifted beings may be said to have endeared our language and institutions—our national character, and the very scenery and artificial objects which mark our soil—to all who are acquainted with, and can appreciate their writings. A regard for our national authors enters into and forms part of the most sacred feelings of every educated man, and it would not be easy to estimate in what degree it is to this sentiment that we are indebted for all of good and great that centres in the name of England. Assuredly, in our common reverence for a Shakespeare, a Milton, a Scott, we have a social and uniting sentiment, which not only contains in itself part of our happiness as a people, but much that counteracts influences that tend to set us in division.¹²

チェンバーズ兄弟は出版業を教養・人格形成に資する最大的手段として信じ

12 Robert Chambers, 'Preface' to *Cyclopaedia of English Literature* (Edinburgh: William and Robert Chambers, 1840-43), I, p. i.

て疑わなかった。『イギリス文学史』に使用された次のロゴはいずれも創造主(美神)がつむぐ豊饒な詩藻を読み手に運ぶエンブレムとして機能している。キューピッドのすがたは文化の担い手としての自負でもあった。



『イギリス文学史』タイトル、見返しページに付されたロゴ

さて、チェンバーズが出版した書籍のなかでもっとも永く生命力をもったのは百科事典である。20世紀後半まで販売されていたほどだからである。この序文にはチェンバーズ兄弟がたちかしてきた<知>の堆積がみごとに体系化されていることがうかがえる。断片でしかなかった事実のひとつ、ひとつが手をたずさえてひとつの<知>をつくりあげたのである。ヴィクトリア朝の<知>の集合体と言い換えてもよい。

The general character of the work, now thus far advanced, is indicated by its title — *A Dictionary of Universal Knowledge for the people*. The several topics are not handled with a view to the technical instruction of those who have to make a special study of particular branches of knowledge or art. The information given may be characterised as *non-professional*, embracing those points of the several subjects which every intelligent man or woman may have occasion to speak or think about. At the same time, every effort is made that the statements, so far as they go, shall be precise and scientifically accurate. One great aim in the arrangement of the work has been to render it

easy of consultation. It is expressly a Dictionary, in one alphabet, as distinguished on the one hand from a collection of exhaustive treatises, and, on the other, from a set of Dictionaries of special branches of knowledge. To save the necessity of wading through a long treatise in order to find, perhaps, a single fact, the various masses of systematic knowledge have been broken down, as it were, to as great a degree as is consistent with the separate explanation of the several fragments. In the greater number of articles, however, there will be found copious references to other heads with which they stand in natural connection; and thus, while a single fact is readily found, its relation to other facts is not lost sight of. It will be observed, that by means of accentuation, some assistance is given in the pronouncing of the proper names which form the heads of the articles. At the conclusion of the work, it is intended to give a copious General Index, referring not only to the distinct articles, but to subjects casually noticed—an arrangement which cannot fail to be of considerable use to those who wish to consult the work on many matters of interest.¹³

次に、独学者の形成という面を理解するうえで、オールティック、J. ライト、チェンバース兄弟を論じるうえで逸してならないのはJ. キャッセルの存在である。ここでもオールティックの所論を中断して紙幅をこの面についやしてみよう。

J. キャッセル

マンチェスターで宿屋を経営する父と農夫の娘であった母の間に生まれたジョン・キャッセル (John Cassell, 1817-65) は、幼少の頃、父が死亡したこともあって、ほとんど教育らしい教育は受けていない。学校よりも地元の織物工場で職工として働かねばならなかった。16歳から19歳にかけて、サルフォードで接合工に従事していたが、その時社会改良家トマス・ホイッテエッカー

13 W. & R. Chambers, Preface to *Chambers's Encyclopaedia: A Dictionary of Universal Knowledge for the People* (Edinburgh: William and Robert Chambers, 1860), I, p. ii.

(Thomas Whittaker, 1813-99) の影響を多大にうけ、禁酒運動に参加する。1835年7月、入会誓約を行い、その証しとして禁酒運動を推進するための布教活動を展開していき、最後に、ロンドンへたどり着いた(1836年10月)。正式な会員(the National Temperance Society)になったキャッセルは、イースト・アングリアを活動の拠点として、わずか2ヶ月の間に550件もの誓約をとりつけた。ランカシャー訛むき出しでまくしたてる活動家の姿は人々にきわめて印象的に映ったらしい。キャッセルは、1841年、教養深い女性メアリー・アボット(Marry Abbott, d. 1855)と結婚するが、その持参金をもとに茶販売会社を設立し、軌道にのせていく(1849年3月)。後年の巧みな宣伝がすでにこの時期に見られる。'Buy Cassell's Shilling Coffee'という、頭韻をきわめて有効に用いた惹句はロンドンっ子の口をついて出た。コーヒー販売から得た利潤で、雑誌『絶対禁酒会会報』(*The Teetotal Times*)を出版したことは、後年の出版業の第一歩とみなしてよい。

リチャード・コブデン、ジョゼフ・ヒューズに私淑していた、キャッセルは、急進的な自由主義を標榜する雑誌(*The Standard of Freedom*)を皮切りに『ロンドン・マーキュリー』(*The London Mercury*)、『移住年報』(*The Emigrant's Almanack and Directory*, 1849)などを出し、『労働者の友』(*The Working Man's Friend, and Family Instructor*, 1850)は1年満たないうちに10万部の発行部数を誇るまでになった。土地の終生保有を唱える雑誌(*The Freeholder*)を出している頃、万国博覧会が催され、木版を多数挿絵に加えた全4巻からなる博覧会の大図録(*The Illustrated Exhibitor*, 1851)はその本格的な出版物の嚆矢と言っている。

これまでの出版経緯を振り返ってみても、キャッセルにはひとつの特徴がはっきりと見てとれる。それは自己主張と読者の好奇心という相反するものを巧妙にバランスをとっていく出版人のすがたである。この「教養」と「娯楽」という好対照の側面をみごとに融合させて、教養家庭雑誌を出版しつづけたキャッセルは、彼自身もまた独学自立を体得したヴィクトリア朝の典型的な立身出世者のひとりであった。

よって、キャッセルの主張が『バニー・マガジン』を出版したチャールズ・ナイトと軌を一にしていたのは何も不思議ではない。1851年5月、知識への課

税を反対する委員会の席上で出版人としての矜持を開陳している——「出版業を志した理由はただひとつ。労働者を教化する出版物を出して、道徳心を向上させ幸福を追求することであった」。

キャッセルがナイトの衣鉢を継いでいるのは明らかである。ナイトが『ペニー・マガジン』に寄せた序文をみると、両者の相同性はきわだっている。ナイトは出版人らしく過去と現代の出版部数の比較から口火を切り出す。

It was considered by Edmund Burke, about forty years ago, that there were eighty thousand *readers* in this country. In the present year it has been shown, by the sale of the 'Penny Magazine,' that there are two hundred thousand *purchasers* of one periodical work. It may be fairly calculated that the number of readers of that single work amounts to a million.

さらに続けて本誌には読者の知識欲、向学心を減退させるものは一切介在していない、と強調してみせる。

If this incontestable evidence of the spread of the ability to read be most satisfactory, it is still more satisfactory to consider the species of reading which has had such an extensive and increasing popularity. In this work there has never been a single sentence that could inflame a vicious appetite; and not a paragraph that could minister to prejudices and superstitions which a few years since were common. There have been no excitements for the lovers of the marvelous—no tattle or abuse for the gratification of a diseased taste for personality—and, above all, no party politics.

ここで自然誌(史)が教養の対象とされている点がきわめて興味深い。知識体系が現実的でより実際の応用面によりそっているからだ。しかも学問の中心が記述であることを考えればナイトがいう「読む」「書く」能力が前提として問われていることになるからである。身の周りの世界を索引化してみせようとする

るヴィクトリア朝の試みは習学者の素朴にして素直な好奇心と強く結びついていたのであった。

The subjects which have uniformly been treated have been of the broadest and simplest character. Striking points of Natural History—Accounts of the great Works of Art in Sculpture and Painting—Descriptions of such Antiquities as possess historical interest—Personal Narratives of Travellers—Biographies of Men who have had a permanent influence on the condition of the world—Elementary Principles of Language and Numbers—established facts in Statistics and Political Economy—these have supplied the materials for exciting the curiosity of a million of readers. This consideration furnishes the most convincing answer to the few (if any there now remain) who assert that General Education is an evil. The people will not abuse the power they have acquired to read, and therefore to think.

ナイトは所論の最後でミルトンの『アレオパジティカ』(*Areopagitica*, 1644)の有名な冒頭部を引用する。ミルトンが指摘した、言論の自由は良き言論、悪しき言論といった検閲をえず、差別化することなく守らなければならないという論点を、ナイトは巧みにずらしながら引用して、知識、教養に対しても差別化してはならないと強調しているのである。

Let them be addressed in the spirit of sincerity and respect, and they will prove that they are fully entitled to the praise which Milton bestowed upon their forefathers, as “a nation not show and dull, but of a quick, ingenious, and piercing spirit,—acute to invent, subtle and sinewy to discourse, not beneath the reach of any point the highest that human capacity can soar to.”¹⁴

14 Charles Knight, Preface to *The Penny Magazine of the Society for the Diffusion of Useful Knowledge* (London: The Society for the Diffusion of Useful Knowledge, 1832), p. iii.

結論部に到り、ナイトとキャッセルがきわめて近い関係に立っていることがわかるであろう。

1853年12月に創刊された『家庭画報』(Cassell's Illustrated Family Paper)は、「絵入り新聞と大衆雑誌を合体させた」(副編集長トマス・フロスト)雑誌で、小説、時事論説、歴史、地理、チェス、ファッション、料理レシピ、そして読者からの投書相談欄まで掲載しており、記事にはかならず木版画がそえられていた。ヴィクトリア朝の労働者のあいだで争って読まれたのも無理はない。時あたかもクリミア戦争のときで、紙面におどる生々しい戦場の絵は強く読者の愛国心をもつかみ、販売部数を伸ばしつづけた。誌名の変更をかさねながらも1932年まで生き延びた同時代の雑誌はわずかしかない。

『家庭画報』が教養よりもはるかに「娯楽」に傾斜していたのとは好対照に、『ポピュラー・エデュケーター』は、(ジョゼフ・ライトの例にみられるように)まさに「独学の人々」のための雑誌であった。学問、物語の全領域を提供し、のちには各学問分野が独立して教科書としても出版された。独習者のために夜学の学校を設立し、また独学者が大学で学べるようにロンドン大学へ要請書を出したキャッセルには独学者への支援を訴える強い信念が終生ありつづけた。それは自らが「独学者」であったという体験をふまえてのことであったの言うまでもない。

チャールズ・ナイト、チェンバーズ兄弟とともにヴィクトリア中期の独学者を鼓舞した出版人としてキャッセルは評価されているが、商業出版者としてもまた教育出版者としても、両者よりもはるかに成功し、同時代の教養、感性を育成することができたのは、ナイトよりも読者が求めているものを知り、市場経済に対して洞察力があったからである。そして、チェンバーズ兄弟の穩健な姿勢をとるよりも労働者階級がかかえていた急進的志向を鋭くかぎとっていたからにはほかならない。1864年、胃癌のためキャッセルは倒れたが、キャッセル社は現在でもなお盛業を誇っている。

J.M.デント

独学で社会的栄達を果たしたために、独学者の力になろうとして、独学者を

支援する出版業を開始した出版人に、ジョゼフ・M・デント（Joseph Malaby Dent, 1849-1926）がいる。J.キャッセルとともにヴィクトリア朝の教育出版界に寄与した代表的な人物である。

塗装工の10番目の子供として生を享けたデントは、ウェズレー派の学校へ13歳まで通っただけで、文字通りヴィクトリア朝の独学者の代表ともみなされる人物である。15歳のとき、文学の素晴らしさに開眼し、文学の醍醐味を教えてください、人格形成に資した作品を、万人に廉価で古典作品を提供しようとするエヴリマン・ライブラリーの第一巻目にすえた。ボズエルの『ジョンソン博士伝』がその作品である。このイギリス伝記の傑作こそデントを文学という名の「信仰」へ導いた作品であった。

1889年、出版社を起業したデントはいきなりエヴリマン・ライブラリーを創刊したのではなかった。それなりの助走期間があり、そこで後世に残る叢書の数々を編纂し、読書界に寄与したのであった。しかもそのいずれも独学者のために、という視点をわすれていなかった。

デント自身がシェイクスピア協会の書記をしていた時、ずさんな校訂、編纂、不明な注のついたシェイクスピアのテキストに会員が困っている様子を見て、即座に40巻にのぼるテンプル・シェイクスピア叢書——この叢書にチャールズ・ナイトの色濃い影響をみることは容易である——を計画し、1894年から96年にかけて、ウォルター・クレインの挿絵をタイトルページにしたテンプル版はほぼ40年間で500万冊を売りつくした。次にエリザベス朝の劇作家を中心にしたテンプル劇作品集、テンプル伝記集、テンプル古典集などのテンプル双書を陸続と出版していずれも成功をおさめた。中にはテンプル聖書双書は31巻からなる一大文庫であった。その間に『人間喜劇』を収めたバルザック全集全31巻——各巻にG.セイントペリーの序文がついている——を英訳出版し、さらにフィールディング、スコット、ディケンズ、ユーゴ、サッカレー、ヘイズリットなどの個人全集、著作集もすべて手がけたが、独学者にもっとも重宝がられたのは『テンプル入門書シリーズ』（The Temple Primers Series）であったことを忘れないでおこう。

こうした叢書出版によって、独学者に寄与したいという願いはさらに強まり、あたかも信仰的な義務感にまで高じていき、世界の名作を1冊1シリングで提

供しようとする、全巻1000巻からなる一大双書エヴリマン・ライブラリーの計画を立てたのは1906年のことであった。この叢書の名称は共同編集者のアーネスト・リース (Ernest Rhys, 1859-1946) が名づけたものであった。天啓のように与えられた名称であるが、作家と読書の関係をじつに妙みにとらえた名称になっている。

When we had planned out the first fifty [in a world library], we had not yet found the one convincing title which would appeal both to the keen reader and the man in the street. Though good at titles, in this case I was utterly baffled, and we were getting very near the date when the books had to be put on the market. Then, one morning, hurrying to Bedford Street, past the Garrick Club, by some association of ideas, I thought of the old play and muttered: 'Everyman, I will go with thee and by thy guide, in thy most need to go by thy side.' Shade of Garrick! I laughed and broke into a run. When I got to the office the old Chief was looking disconsolately at his watch, and I called out: 'Eureka!' and quoting the line— 'Here's our title—Everyman's Library.'

What with the title, still more the choice of authors from Boswell to Pepys, Walter Scott to Hans Andersen, the first fifty, and the second too, went off with such éclat that presses, paper-makers, binders, could hardly keep pace.¹⁵

社員の待遇には吝嗇そのものであったデントがこのような一大事業を樹立できたのは、リースのようなデントの真意をくみとることができた篤士が片腕としていたからである。リース自身、志望を炭坑技師から出版業者に変更した人物であった。実業家であるデントを支え、人間を育てたいという信仰にも似た出版業に対する情熱を両者は共有していたのである。

A Yorkshireman by birth, no doubt he owed his sturdy egotism to the stock he came from, but he had some of the traits, too, that go with the artis-

15 Ernest Rhys, *Wales England Wed: An Autobiography* (London: J.M.Dent, 1940), p.167.

tic temperament. He was highly emotional, and even shed tears when there was some crisis, especially a financial one. He felt that while engaged on his grand scheme to benefit mankind, he was to be indulged, and not called upon to pay casual authors. 'You writers,' he said, 'enjoy you writing, and do not need to be paid, but I sit grinding away all day, with all the trouble and none of the pleasure!'¹⁶

作家と対等にわたり合っている出版人の姿がここにある。

数々の文芸出版を手がけたデント一流の冴えが安価な文庫、すなわち見すばらしい廉価本というにはこの叢書をしなかった、高名な装丁家レジナルド・ノールズ (Reginald Knowles) が製本を担当し、ウィリアム・モリスのケルムスコット調のタイトルページをしつらえ、表紙には鮮やかな金文字がおどっていた。

この叢書が大成功をおさめたため、テンプル・プレスを起こし、事業をさらに拡大しようとした。ところが、好事魔が多しというが、1912年に創刊した文芸週刊誌『エヴリマン』が失敗し、また第一次世界大戦が勃発したため、インフレが生じ価格値上げをせざるを得なくなり、原材料の枯渇から安価な本造りを指向せざるをえなくなってしまい、一時期の勢いは失速していった（ふたりの息子も戦死した）。創刊してほぼ半世紀後、この文庫は著作権の切れたヴィクトリア朝の小説群ばかりが目につき、いささか時代遅れの感が色濃くただよっていた。社主デント自身が敬虔なピューリタンであったため、この叢書のなかへデフォの『モル・フランダース』、トビアス・スモレットなどの諸作品は絶対に入れようとはしなかった。エヴリマン・ライブラリーは、デント自身もくろんだ1000冊目の記念すべき発行を見たのは1956年のことであり、彼自身の目でその慶賀すべき瞬間を見守ることができなかったものの、2000万部の売上げ達成を生前に目にできたのはまさに独学から起業した出版人としては本懐でもあった。国民の教養として名作叢書という確たる基準となったのだから、こ

16 *Ibid.*, p.166.

れ以上望みうるものはないはずである。

V 結びにかえて——人はなぜ本を読むか

独学者と読書の関係を追究していくと、興味深いひとつの事実が浮き上がってくる。

たしかに読書とは印刷された印字を目で追っていき、盛り込まれた内容を頭で咀嚼して、何らかの知識、教養として蓄えるものである。だが、上述してきた独学者たちを見てみると「読む力」が何も読解力だけに限定されていないことがわかる。自らの人生において未来を切り拓いていくときに直面する様々な問題を解決していく力にもなっていることがわかる。また対人関係にあって相手の気持ちを「読み」、さらにその立場を理解していくのもいわば「読む力」にはかならない。人間が生きていくために必要な物事を理解する能力、判断する能力、予知する能力などすべての能力を形成するのに読書は不可欠な営為なのである。生きるために必要な能力とさえみなしてもよい。だからジョゼフ・ライトの学問の根底には人を喜ばそうとする、突き上げてくるような、それでいて静かな衝動があったと見るべきである。

The great thing in life is to try to please everybody, but that is impossible. Personally I always feel that the real thing is to be quite sure one is pleasing one's self. If a person pleases himself he always has the satisfaction of knowing that at any rate one person in the world is pleased. If a person thoroughly and conscientiously pleases himself the probability is that he pleases the majority also.¹⁷

ライトが到達した、〈知〉の領域を広げる驚くような業績もかくまでも人間的な気持ちに支えられていたのである。こうした全人格を表すような力も読書によって少なからず習得され、形成されていったのである。なぜならば活字のなかにこそ、そして活字を通じて「歓び」を見出していったのだから。

17 *The Life of Joseph Wright*, I, p.vii.

附録



愛犬とたわむれる夫人
(同封されていた写真)

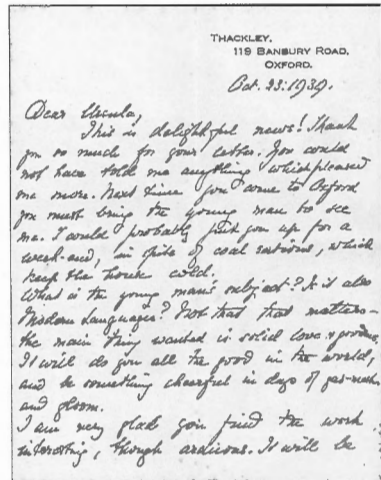
本文で言及したように、ジョゼフ・ライト夫妻は学生たちを自宅に招いて向学心をたえず刺激し、育成しようとした。自宅も教室というわけである。独学、篤学の士に似つかわしい行為であるが、博士の死後も夫人エリザベスによって自宅を開放した学生たちとの交流は続いていた。“Many a whilom undergraduate remembers him not as a famous scholar so much as a welcoming host, whom to know was to love. Hence I have given space in my picture for some account of our ‘Sunday teas.’” (Preface, vii) と述べているように。オックスフォードの古書店で入手した未発表書簡は戦時中の厳しい状況下でも変わらない歓待があったことをつぶさに語っている。

Thackley,
119 Banbury Road
Oxford
Oct. 23. 1939,

Dear Ursula,

This is delightful news! Thank you so much for your letter. You could not have told me anything which pleased me more. Next time you come to Oxford you must bring the young man to see me. I could probably put you up for a weekend, in spite of coal rations, which keep the house cold.

What is the young man's subject? Is it also Modern Languages? Not that that matters, the main thing wanted is still love & goodness. It will do you all



E. ライトの自筆書簡

the good in the world, and be something cheerful in days of gas-masks and gloom.

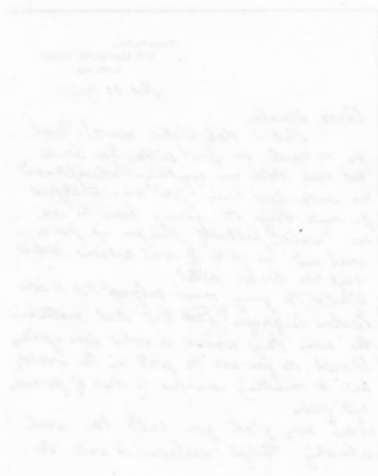
I am very glad you find the work interesting, though arduous. It will be easier when you have digested the laws and regulations. I hope you have nice colleagues.

Mrs. Faucett was passing the Press the other day, and thought she would ask if you were still there. She was friendly handed on to Dr. Johnson, who told her of your new job, and of the most enthusiastically of you. 'Splendid girl! One of the best!' He evidently expects you to be a success in your work.

My love and very good wishes,

Yours affectionately

Elizabeth M. Wright



119 Langley Road
Oxford
Oct. 23, 1939

Dear I. ...
This is a delightful news. Thank you
so much for your letter. You could
not have told me anything which
pleased me more. Next time you
come to Oxford will must bring the young man to see me. I could probably
put you up for a weekend in spite of coal ration, which keep the house cold.
What is the young man's subject? Is it also Modern Language? Not that
that matters the main thing wanted is still love & goodness. It will do you all